

2019年にドイツで開催された東電福島原発大惨事関連イベントのご紹介 (6) 福島からの自力避難者「欧州講演ツアー」報告

在欧環境ジャーナリスト 川崎陽子

前回(5)の記事で紹介した北ドイツのアクション週間と並行して、フランスの「遠くの隣人 3.11」という団体が中心に企画した「フランス・イギリスななつぼしツアー」がありました。今年の欧州講演ツアーには、
いわき市から東京に避難中の鴨下美和さん母子、
郡山市から大阪に避難中の森松亜明希子さん母子、
お子さんを北海道に避難させて郡山市でカフェを営んでらっしゃる横田麻美さんが来ていただきました。

最初に、フランスのリヨンで講演した横田さんと森松さんの写真です。前回の記事同様、写真の使用許可をくださった遠藤さんに感謝します。



© VJU, D.Endo 2019

アンベリユでは、高校などで3回講演をしたそうです。近辺にあるブジェ原発はフランスではフェッセンハイムに続いて2番目に古く、上流にもろいダムがあり、決壊すれば山津波の可能性もあるそうです。また、もんじゅに相当する高速増殖炉スーパーフェニックスの廃炉現場も近く、この辺りは70年代から脱原発・反原発運動の歴史のある地域ということです。農業も盛んなので、地元で生業の危機に晒される人の意識が高いのでしょう。

森松さんの8歳の娘さん、明愛(めいあ)さんは、オートランという山の中の村の図書館で、小学生相手にお話し会をしたときの紙芝居のことを、ドイツでの講演で話していました。

森松さんは、27日間の欧州滞在期間に25回講演をしたそうです。私の(5)の記事では、鴨下さんのドイツでの学校訪問を紹介しましたが、森松さんと横田さんは、フランスで多くの学校を訪問しました。

ドイツのアーヘン市での講演について書いた、「[原発事故避難の母子、欧州で『被ばくと人権』訴え](#)」(*文末参照)という記事に載せられなかった、写真や内容を補足します。重複する部分は、ここにはほとんど書いていないので、前回の記事も併せてご一読ください。

3月31日(日)午後からのベルギーの首都ブリュッセルで講演が決まったとき、鴨下さんと森松さんから、その後、車で1時間半ほどのドイツのアーヘンにきて講演が可能という連絡がありました。そこで、昨年同様「さよならニュークス・デュッセルドルフ(SND)」とドイツの緑の党の共催で、アーヘンにある緑の党の事務所で講演会を開くことができました。

さらに、翌日は夕方パリに戻れば良いということで、昼間の講演会の可能性も探しました。幸運にも、幸子さんの日本語の生徒さんが、通っているギムナジウム(小5~高3まで一貫の進学系公立学校)の先生に話してくれて、「環境議会(10歳から18歳までの全学年の生徒約50名が構成)」の特別授業が実現したのです。

二日間の通訳をご厚意で務めてくださった SND の鹿沼・クレツア一和子さん、多方面で協力してくださった SND のみなさん、そして、アーヘン在住のお二人、日本語教師の Gerke 幸子さんと、森松さんの幼馴染の坂本晶さんの、ご尽力のおかげでもあります。

アーヘンへの想い (sachikoさんとのチャットから抜粋)

まずは、鴨下さんが幸子さんに宛てて書いた「アーヘンへの想い」(独語訳を緑の党に送りました)と、幸子さんが創ってくださった講演会のパンフレットをご覧ください。

私は昨年3月、アーヘンに行って衝撃を受けました。脱原発を宣言したはずのドイツが、何故デモをしているのか? 町中、ポスターが堂々と貼られていて・・・

それがただただ嬉しかった。思いがけず、遠い異国で希望を貰えたのです。空気が吸えた感じがしました。

福島と正反対でした。福島にいと、何が正しいのか、わからなくなってくるのです。そこに放射能があるのに、ゆがめられ声も上げられない福島。

あれだけの痛みを味わったのに、ゆるゆると原発再稼働を許している日本。国民が諦めているのです。従うしかないのだと。だからこそ、安倍政権は平気でいられる。

本当は再稼働も原発輸出も、全然うまくいっていないのに、それでも日本国内の世論は、反原発を堂々と喝えられないでいます。被害者が被害を訴えるとバッシングされ、社会的に殺されます。

だから、どうしてもなくて、私たちは国連に訴えました。6年間、日本で訴え続けたけど、何も良くならなかったから。むしろ坂道を転がる様に、悪くなる一方だったから。でも、日本を飛び出してみたら、まだまだ世界は諦めてなかったことが良く判りました。

日本で講演をすると、結構多くの場合『可哀相で無力な被害者』であることを期待されます。もしかして、可哀相な人を支援するという優越感に浸りたいだけ? と感じて、悲しくなることがあります。言葉は悪いですが、自分より低いカーストを見て安心する というような・・・

なので、被害者が泣きながら被害を訴えることは歓迎するけれど、被害者が人権を掲げて堂々と訴え始めると『みんな(俺だって)我儘してるんだから、文句を言うな』と、急に態度が硬くなったりします。私たちより先に、人権を投げ捨ててしまっている人が沢山いるように思います。



パンフレットの表面

Akiko MORIMATSU
 In ihrem damaligen Wohnort Stadt Kōriyama (70km westlich des AKW Fukushima) war sie von der Atom-Katastrophe 2011 direkt betroffen.
 Mit ihren zwei Kindern (3J und 5M) musste sie in dessen Folge mehrere Monate lang in einer Notunterkunft in Fukushima leben.
 Im Mai 2011 zog sie mit ihren Kindern nach Osaka, wo sie bis heute wohnt.

Sie ist Gründungsmitglied und Leiterin der „Vereinigung der im Folge des Tōhoku-Erdbebens Geflohenen – Thanks & Dreams“.
 Im März 2018 hielt sie eine Rede vor dem UN Menschenrechtsrat in Genf und im Juli 2018 wurde sie als Zeuge im Japanischen Parlament angehört.

Kazumi KUSANO
 In Folge der der Erdbebenkatastrophe 2011 floh sie mit ihren zwei Kindern aus ihrem damaligen Wohnort, der Stadt Iwaki in der Präfektur Fukushima nach Tokio.
 Dort mussten sie insgesamt fünf Mal von einer Notunterkunft zur Nächsten umziehen, bevor ihnen letztendlich ein provisorisches Wohnhäuschen bereitgestellt wurde.
 Im März 2017 sollten sie diese Bleibe allerdings auf staatlicher Anordnung wieder verlassen und zurück nach Stadt Iwaki (50 km südlich der Atomruine Fukushima) ziehen. Trotz wiederholter Räumungsversuche widersetzte sie sich zusammen mit anderen Flüchtlingen bis heute erfolgreich dieser Anordnung.

say, nara
 2008
 2011
 2012
 2013
 2014
 2015
 2016
 2017
 2018
 2019
 2020
 2021
 2022
 2023
 2024

パンフレットの裏面

日本にいと、息の吸い方を忘れそうになります。

でも、アーヘンでは、聞いてくださった皆様が『遠い東の果てのバカな島国の惨事』としてではなく、『自分達の問題』として、福島の話に向き合ってくださいましたことが、何より嬉しかったのです。

アーヘンでの講演後に国会議員の方が言われた言葉

『私たちの歩んできた道は、間違いではなかった』

それは、否定され続けた私たちの道をも肯定してくださった言葉でした。

嬉しかったです。国を越え、言葉を越えて、想いが通じたのだと

アーヘンには、私たちと同じ想いを持って、被曝の無い世界のために、私たちよりずっと前から歩んでいる方々が沢山いる。

そういう交流ができることが、講演の魅力だなと思っています。

だから、アーヘンに森松さんを連れて行きたかったのです。

日本で声をあげて闘うのは、本当に苦しいことです。

それを、全身に受けながらがんばっている森松さんに

アーヘンの空気を吸って、感じて、

アーヘンの勇気をいっぱい貰って欲しかった。

パッシングされるたびに

仲間や身内から傷つけられるたびに

立ちすくんでしまう心弱い私を

街そのものが肯定してくれるところ、それがアーヘンです。

3月末に伺えることが、本当に楽しみです。

ブリュッセルでの講演後、高速道路を急いで駆けつけ、深夜まで続いた「アーヘン緑の党」事務所での講演。60名近い参加者で満席でした。



左から、森松明希子さん、明愛さん、鴨下全生さん、美和さん



生後5ヶ月の時に3.11が起き、2ヶ月後に大阪に避難した8歳の明愛(めいあ)さんは、狭い避難先の住居には置けないため、雛人形を知らなかったそうです。彼女は、フランスから一人で原発事故被害者からのメッセージを持った雛人形を運び、二日間の講演会場で飾ってくれました。



アーヘン市にあるギムナジウム(小5~高3まで一貫の進学系公立学校)での
「環境議会(10歳から18歳までの全学年の生徒約50名が構成)」特別授業



講演で、鴨下さんと森松さんが特に生徒たちに伝えたかったこと、16歳の全生さんがドイツ人生徒と一緒にローマ法王への手紙を朗読したことは、文末にリンクのある記事に書きました。他にも、世界共通の言葉で「国内避難民」と呼ばれる立場であること、政府から避難住宅から追い出されようとしていることなどを説明した後、多くの質問の手が挙がりました。当てられなかった時は、ずっと手を挙げたままです。手を降ろすと、もう意見や質問はないとみなされるからだそうです。



特に、最前列の青いシャツの10歳の男の子は3度も質問し、自力避難者たちが、「真面目だなー」と感嘆の声を上げたのです。その質問とは・・・

「地震や津波のあと、町はすごく混乱していましたか」
「質問が二つあります。直後に身体の異常を感じましたか。もう一つは、チェルノブイリ原発のように、石棺で放射能を閉じ込めるようなことをするのですか」
「チェルノブイリ原発事故のときは、きのことか野生の動物とかを食べないようにとか、ドイツでも相当問題になりました。
で、質問ですけど、ローマ法王は何か「助けてくれる」とか言ってくれましたか」

他の生徒たちから出された質問は・・・

「けが人とか気絶した人とかは、いませんでしたか」
「団体避難みたいに、近所の人たちは一緒に避難したのですか」
「近所の人たちと今も連絡を取り合ったりしていますか」
「森松さんの夫は、放射能の健康被害はないのですか」
「医師なら、他の場所でも仕事ができるのではありませんか」
「裁判に出られている写真があり、人権について訴えたとのことですが、どのようなことを訴えたのですか」
「こういうことを、他のいくつかの学校でもしてきたのですか」
「飲み水を濾過して安全にすることはできないのですか」
「福島からの避難者が、みんなを騙してお金を取ろうとしているとかいう、いじめに対して、日本政府はもっと正しい情報を流して欲しい、というデモなどはないのですか」
「避難するまで、どのくらいの期間故郷にいたのですか」
「日本政府は、30km 圏外でも危険であることを白状したのでしょうか。まだ隠しているのですか」
「いじめはまだ続いていますか。それとも法王に会ったことで、自由に話せるようになるのかな」
「除染によって道路の表面とかをきれいにして、今の状態はどうなっているのでしょうか」
「(森松さん家族が避難前に)2ヶ月間家に閉じこもって、どうやって生きていたんですか」
先生からの質問は、「講演や裁判の資金は、どうやって賄っているのですか」でした。

この「環境会議」を担当している先生(名前を忘れてごめんなさい)の締めくくりの言葉は、講演者にとって、とても印象深かったそうなので、完全ではありませんが抄訳を載せます。



最後に私から個人的に総括を述べます。私は 43 歳になりました。君たちの年齢のとき、統計上では原発事故は 10 万年に1度となっていたが、43 歳になるまでにすでにチェルノブイリとフクシマを経験した。つまり、統計はウソだった。今日、我々は、原発事故がどのような意味を持ち、それによってどれほど辛くひどい運命にさらされるのか、非常に印象深い話を聞くことができました。我々は、まだ核のごみをいったいどこに貯蔵すればよいかもわかっていない。このドイツでも、原発がこれから先長い間にどうなっていくのかもわからない。だからこそ、実際に原発事故によって被害を受けた当事者に直接会って話を聞くことができ、とても意味があった。

おそらく日本では、政府と東電に対する闘いは、人々が本気で理解して支援するようになるまで、まだ長い時間がかかるだろう。

＊クレジット付きの写真を提供して下さった遠藤監督のご紹介

=====

遠藤大輔 Daisuke Endo

VJU ビデオジャーナリストユニオン 代表

公式サイト <https://vjunior.jimdofree.com/>

=====

映像で社会のボトムアップを目指すビデオジャーナリストの放送局

「BOTTOM UP! CHANNEL (β)(ボトムアップチャンネル)」

好評配信中！ <https://www.youtube.com/user/DropOutTvOnline>

鴨下さん親子が

バチカンでローマ法王に謁見した動画の拡散とチャンネル登録をお願いします。

<https://youtu.be/hROTDIM2bHM>



遠藤監督と鴨下祐也さん(東京避難者裁判の原告団長:上の写真右)が企画した映画「恐怖のカウントダウン -東海第二原発を止めたい-」の上映キャンペーンも実施中です。

＊本文の中で(*文末参照)と書いた部分の記事です。

「メディア」欄の以下のサイトからご覧ください。

＊原発難民の母子「なぜ福島に帰れないか」、欧州で講演(2018年の記事)

<http://www.alterna.co.jp/23983>

＊原発避難の16歳、ドイツの学校で法王への手紙朗読

<http://www.alterna.co.jp/27227>

＊原発事故避難の母子、欧州で「被ばくと人権」訴え

<http://www.alterna.co.jp/27218>

(了)